

令和元年度 フランス国立パリ聾学校（INJS）とのオンライン交流

久川 浩太郎・澤口 真弓

筑波大学附属聴覚特別支援学校では、平成 15 年にフランス国立パリ聾学校と姉妹校協定を締結して以来、オンライン交流や相互訪問交流などで交流を重ねてきた。令和元年度は、高等部普通科生徒がビデオ通話サービス Skype を利用したオンライン交流を 3 回実施した。オンライン交流の準備・実施・振り返り活動を通して、生徒の交流相手国に関する興味関心が高まったり、コミュニケーションや英語の学習に対する意欲が向上したりすることが示され、国際交流におけるオンライン交流の重要性が示唆された。

キー・ワード：国際交流 オンライン交流 コミュニケーション 異文化体験 異文化理解

1 はじめに

筑波大学附属聴覚特別支援学校（以下、本校）とフランス国立パリ聾学校（Institut National de Jeunes Sourds de Paris：以下、パリ聾学校）との交流は、平成 15 年の姉妹校協定の締結から始まり、オンライン交流は平成 25 年より行っている。平成 25 年のオンライン交流は、本校からパリ聾学校への最初の訪問時に、本校寄宿舎との間で行われた。本校寄宿舎には高等部普通科の生徒も数多く在籍していたが、通学生はこの交流には参加できなかったため、平成 28 年からは放課後の時間を利用してオンライン交流を行った。その結果、異文化理解やコミュニケーション能力の向上など、オンライン交流を活用した国際交流の効果が示唆された（伊藤・松本・久川, 2017）。

令和元年度は、12 月にパリ聾学校へ訪問し交流することが決まっていたこともあり、オンライン交流を 3 回行った。それぞれ希望者を募り、第一回 8 名、第二回 9 名、第三回 11 名の生徒が参加し、第三回はパリへ訪問する生徒を中心に行った。

フランスと日本の時差は夏時間が 7 時間、冬時間は 8 時間であるため、第一回、第二回は日本時間の 16 時（フランスは 9 時）から、第三回は日本時間の 17 時（フランスは 9 時）から 1 時間程度交流を行った。

2 オンライン交流の実践

令和元年度のオンライン交流は、ビデオ通話サービス Skype（以下、Skype）を使用して、1 学期に 1 回（4 月 19 日）、2 学期に 2 回（9 月 27 日、11 月 22 日）の計 3 回実施した。

第一回の交流では、パリ聾学校の生徒とコミュニケーションをとり、お互いのことを知ることを目標にしたため事前準備を 1 回とした。第二回の交流では、第一回の交流の反省を受けて、事前準備を 4 回行った。第三回は、第二回の交流の内容を引き続き使用したため、事前準備は 1 回とした。

本研究では、第二回のオンライン交流を中心に考察する。

(1) オンライン交流第一回（4 月 19 日）

第一回の交流では、本校とパリ聾学校の生徒がそれぞれ自己紹介を行い、本校について紹介した。質疑応答の際は、パリ聾学校の生徒はホワイトボードに英語を書いたり、フランスの手話を使ったりしてコミュニケーションを図った。また、「ありがとう」の日本の手話を表現する場面も見られた。本校生徒はタブレット端末に英語を書き、日本の手話を使ったり英語を発話したりしてコミュニケーションを図った。

第一回のオンライン交流後、反省会を行った。「フランス語の基本的な挨拶や、フランスの手話での自己紹介を事前に勉強すればよかった」、「大人数での

自由な会話は難しいので、今回は少人数のグループに別れて、フリートークをしたい」、「名札をつければよかった」、「交流を促すために教員同士が英語で話していることがあり、もっと自分達で積極的に発言しなければならないと思った」という意見があった。

(2) 第二回オンライン交流事前準備

第二回の交流では、昼休みの時間を利用し4回の事前準備を行った。第一回の交流は、今年度初めてのオンライン交流であったことや、お互いのことをあまり知らずに交流したこともあり、会話が弾みにくい状況であった。そこで、第二回の交流では、パリ聾学校の生徒に日本や本校について知ってもらうことで、会話が円滑に進むようにすることを目標とした。

① 準備第一回（7月12日）

オンライン交流に参加したい生徒が集まり、交流の内容や準備の進め方について話し合った。第一回の交流に参加していなかった生徒もいたので、上級生が第一回の交流の様子や良かった点、改善点等を端的に説明した。

② 準備第二回（9月6日）

オンライン交流の内容について、上級生が中心となり話し合いを行った (Fig. 1)。

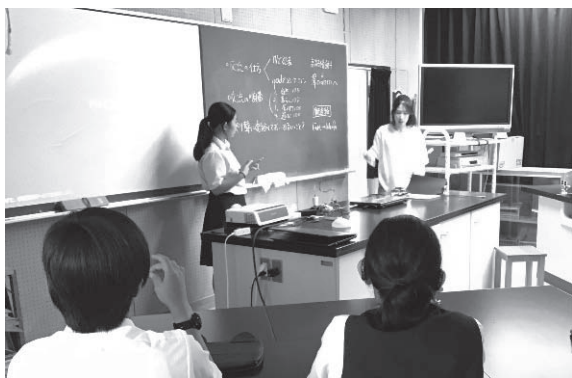


Fig. 1 準備第二回の様子

第一回の交流の反省を基に、学年に関係なく生徒を四つのグループに分け、テーマを話し合った。テーマは、「日本の自然」、「日本の生活」、「日本の文化」、

「日本の遊び」であった。各グループの人数を少なく設定することで、それぞれのグループの中で発言しやすくしたり、事前準備を行いやすくしたりした。また上級生は、交流準備全体のとりまとめや司会を担当した。

事前準備第三回までに、各グループでタブレット端末のアプリ「ロイロノートスクール」を用いてスライド資料を作成することとした。

③ 準備第三回（9月13日）

それぞれのグループが作成したスライド資料に基づきプレゼンテーションを行い、生徒同士で意見交換を行った。

第一回の交流の反省で、「自分たちが用意した自己紹介が Skype の画面を通して見えにくかった」という意見があったので、教員がスライド資料の背景や文字の色について助言をした。生徒からは「文字の大きさ、太さを工夫した方がよい」「1枚のスライドに文章を何行も載せるのではなく、1～2行程度の英文を載せるだけにした方がよい」等の意見が挙がった。そこで、スライド資料の書式等について、文字の色は白で 42pt 程度で太文字、スライドの背景は黒、1枚のスライドにつき英文は1～2行程度に統一した。

④ 準備第四回（9月27日）

第三回の準備の反省を受けて作成したスライド資料に基づきプレゼンテーションを行い、発表の方法や見やすさを生徒同士で確認した。第三回の準備で確認した書式に統一できていないスライドもあったため、生徒同士で指摘しあい、スライドの修正を行った。

第四回の準備の前に、パリ聾学校の教員からオンライン交流の質問項目の資料が送られてきた。そこで、交流資料を基に、誰がどのように発言するかを話し合った。生徒からは、「自分が答えたい話題のときに紙に英語を書いたり、タブレット端末の画面に書き込んだりして答えるのがよい」と、意見が挙がった。「第一回の交流と同じように、発言する人に偏りが出るのは」と、他の生徒から指摘があったが、

「交流に参加したい生徒だから、みんな積極的に発言できるだろう」と、別の意見も出された。協議の結果、各グループの発表に関する話題は該当グループの生徒が中心となってパリ聾学校の生徒と会話し、パリ聾学校の生徒からの質問に関しては、答えたい生徒が答えることとした。

また、今回は司会を担当する上級生を中心に交流を進めることにした。生徒が中心となって交流を進めるために、交流中は可能な限り教員は助言しないようにした。第一回の交流では、パリ聾学校の生徒が「ありがとう」の日本の手話表現を使っていたので、“Bonjour”、“Merci”、“ça va?”の三つのフランスの手話を学び、交流の際に表現できるようにした。

(3) オンライン交流の実践

① 機材や教室内配置

オンライン交流は、スクリーンとプロジェクターが設置されている教室で行った。タブレット端末1台とパリ聾学校のタブレット端末をインターネットに接続して、Skypeの通話チャット機能を使用した。パリ聾学校の生徒の様子をプロジェクターでスクリーンに投影し、参加者全員でパリ聾学校の生徒の様子を確認できるようにした (Fig. 2)。

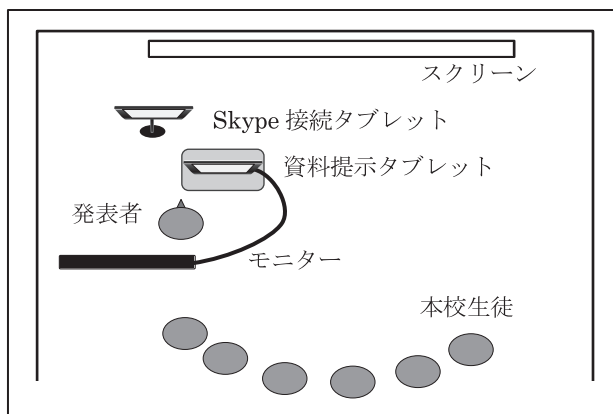


Fig. 2 教室内の配置

スライド資料は、資料提示タブレットからモニターに表示させ、モニターの前で生徒がプレゼンテーションや会話を行った。モニターに表示したスライドをSkypeの通話チャット機能で読み込むため、写真資料等はモニターが反射して見えにくいことがあ

った。その際は、資料提示タブレットを直接 Skype 接続タブレットに近づけて、パリ聾学校の生徒がスライド画面を見やすいように工夫をした (Fig. 3)。



Fig. 3 写真資料等の提示の工夫

② 交流の様子 (9月27日)

交流を開始すると、パリ聾学校の生徒が“Bonjour”とフランスの手話で挨拶をしてくれたので、生徒は予め用意した紙に“Bonjour”と書くとともに、フランスの手話で答えた。その後、パリ聾学校の生徒が事前に用意した資料に沿って英語で質問をし、生徒は英語、手話と身振り等で返答した。生徒が返答した後、“Merci”とフランスの手話をすると、パリ聾学校の生徒は「ありがとう」と日本の手話で答えてくれた。このように、簡単な質問、返答、フランスの手話と日本の手話を繰り返すことで会話が弾み、最初は緊張した様子だった生徒も笑顔が増えるようになった。

次に、本校の生徒が「日本の自然」、「日本の生活」のプレゼンテーションを行った。日本の城の写真に対し、パリ聾学校の生徒が「いいね」「美しいね」という意味で親指を立てた。この表現は第一回の交流の際にもパリ聾学校の教員、生徒が使用していたため、生徒同士で「伝わっている」、「スライドが見えている」、「面白い」等を分かりやすく表現するために、交流の中で繰り返しこの表現を使用した。

本校生徒のプレゼンテーションが終わり、パリ聾学校の生徒が作成した資料に戻った。“What is your school name?”と、パリ聾学校の生徒から質問があったので、生徒は“Tsukuba”と紙に書き、日本の手話で答えた。パリ聾学校の生徒は「筑波」の手

話を繰り返し表現した。

その後、自由に質疑応答が行われ、音楽やマンガ、季節や日本の宗教などの話題になった。パリ聾学校の生徒から、“What are your religion?” “How do you pray?” と、宗教に関する質問があったが、生徒は“religion”の意味が分からなかった。そこで、本校教員が「“religion”は宗教という意味だ」と助言をした。生徒が“Buddhism. But we enjoy Christmas.”と、タブレット端末に書き込み、笑って答えた。パリ聾学校の生徒から“All class?”と、新たな質問があった。フランスではカトリック、イスラム、プロテスタント等の宗教があり、日本の宗教は仏教だけなのかを聞きたかったようであった。パリ聾学校の英語担当教員が“What religion is common in Japan?”と、パリ聾学校の生徒の質問に補足をした。先ほど返答した生徒は戸惑い、他の生徒と相談をし、再度“Buddhism”と答え、手をすり合わせる動作を行った。宗教についての質問に対し、生徒は戸惑っていたが、マンガ等の話題より互いの文化を知るきっかけになったようだ。

その後、交流終了時刻になったので第二回の交流を終えた。事前に用意した「日本の文化」、「日本の遊び」のプレゼンテーションはできなかったため、第三回の交流に持ち越すことにした。

(4) 事後反省会（10月3日）

オンライン交流後に反省や感想などを記述し、事後反省会で意見を共有した。事後反省会では活発な意見交換が行われ、オンライン交流に対する意欲の高さがうかがえた。

3 調査結果

第二回のオンライン交流実施後、選択式の質問紙調査を実施した。質問は10項目で、それぞれの質問項目について、「とてもそう思う」から「全くそう思わない」までの五件法で回答を求めた。各質問項目の回答を、「とてもそう思う＝5点」、「そう思う＝4点」、「どちらでもない＝3点」、「そう思わない＝2点」、「全くそう思わない＝1点」として集計した（Table 1）。

Table 1 質問紙調査結果（N＝8）

質問項目	平均	標準偏差
①発表では交流相手に分かるように工夫した。	3.9	0.6
②準備や練習の時間がもっとほしかった。	3.4	1.2
③交流時間（約1時間）は短かった。	4.8	0.4
④今回の交流を通して、英語に興味をもった。	4.5	0.5
⑤今回の交流を通して、英語をもっと学習したいと思った。	4.6	0.5
⑥今回の交流を通して、フランスの手話に興味をもった。	4.6	0.5
⑦今回の交流を通して、フランスや交流相手に興味をもった。	4.8	0.4
⑧今後も国際交流に取り組んでみたい。	4.9	0.3
⑨オンライン交流ではなく、実際に現地に行きたいと感じた。	4.8	0.4
⑩今回の交流は、社会人になったときに役に立つと思う。	4.8	0.4

選択式の質問紙調査の結果、今後も国際交流に取り組みたいと答える生徒が最も多く、12月にパリ訪問交流が予定されていたことや、定期的にオンライン交流を実施したことが国際交流への意欲につながったと考えられる。また、オンライン交流を通して、フランスやフランスの手話、交流相手に興味をもったり、現地に行きたいと感じたりした生徒も多く、交流相手国に対しての興味関心も高まったことがわかった。

英語に関する項目では、英語に対する興味や学習意欲の向上がみられ、本オンライン交流が、英語の学習に対して効果があると考えられる。伊藤他(2017)の調査結果では、オンライン交流後の英語の学習に対する意欲の向上はみられなかった。本交流では、

事前にパリ聾学校から英語で作成された質問項目が送付されてきており、質問に対する回答を英語で考える活動があった。また、スライド資料の作成やパリ聾学校の生徒とのやり取りにおいても英語を用いており、オンライン交流の内容によって、英語に対する興味や意欲が向上することが示唆された。

事前準備についての項目では、多くの生徒が十分に準備することができたようであった。しかし、当日の交流時間が短かったり、工夫して発表できなかったりしたと答えた生徒も多かった。これは、パリ聾学校の都合で開始時間が遅れてしまったため、交流時間が短くなり、発表することができなかった生徒がいたためであると考えられる。

質問紙調査では、選択式の質問の他に自由記述も行った。質問項目は、①今回のオンライン交流で印象に残ったこと、②今回のオンライン交流でうまくいったこと、③今回のオンライン交流でうまくいかなかったこと、④次回のオンライン交流で取り組みたいこととした。

①オンライン交流で印象に残ったことの記述では、普段使用する言語が違っても、コミュニケーション方法を工夫することで通じ合うことができ嬉しかったと記述した生徒が多かった。特に、ジェスチャーや英語に関する記述が多く、様々な方法を工夫してコミュニケーションを図ることができたと考えられ、コミュニケーションの工夫や意欲の向上につながったと考えられる。

②オンライン交流でうまくいったことの記述では、第一回の反省を踏まえて発表方法を工夫できたことや、日本の文化や季節等を紹介できたことなど、発表方法や内容の工夫についての記述が多かった。これらのことから、グループに分かれて発表内容を検討したり、発表方法を工夫したりしたことは効果的であったと考えられる。

③今回のオンライン交流でうまくいかなかったことの記述では、パリ聾学校からの質問に適切に答えられなかったことや、スライド資料の説明がうまくできなかったことなど、準備不足に関する記述が多かった。これらのことから、事前準備の時間は十分にあったものの、実際の発表の練習時間は少なかつ

たと考えられる。

④次回のオンライン交流で取り組みたいことの記述では、お互いの発表だけではなく、ジェスチャーゲームなどのお互いが楽しめるレクリエーションを行いたいという記述や、プレゼンテーションを行うだけではなく、フリートークを行いたいという記述がみられた。今後、パリ聾学校と連絡を取り合い、オンライン交流の内容を検討していきたい。

4 まとめと今後の展望

第二回のオンライン交流の様子や質問紙調査の結果、国際交流や交流相手国に対する興味関心が高まったり、英語の学習やコミュニケーションに関する意欲が向上したりすることが示唆され、オンライン交流の意義が改めて確認された。今後も定期的にオンライン交流を行っていききたいが、日本とフランスでは時差があり、季節によっても変わることからオンライン交流を年に何度も行うことは容易ではない。そのため、オンライン交流の内容を精査するとともに、オンライン交流に限らずメールでのやり取り等も視野に入れながら、パリ聾学校の生徒と本校生徒が主体的に交流できる内容を検討していきたい。

〔付記〕

本研究は、筑波大学附属聴覚特別支援学校研究倫理審査委員会の承認を得ている。

〔参考文献〕

伊藤詩織・松本邦子・久川浩太郎（2017）フランス国立パリ聾学校（INJS）とのオンライン交流.筑波大学附属聴覚特別支援学校研究紀要,44,88-92.